

関口安義著 『評伝矢内原忠雄』

河内, 重雄
北九州市立大学文学部 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/4103509>

出版情報 : 九大日文. 34, pp.92-95, 2019-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

関口安義著『評伝矢内原忠雄』

KOCHI
KAWAUCHI
SHIRO
重雄

芥川龍之介と第一高等学校生活を共にし、戦前の東大経済学部にて植民地政策に関する講座を担当、戦後に第十六代東大総長に就いた矢内原忠雄。その詳細な評伝が、芥川龍之介研究で知られる関口安義氏によつて今年の四月に刊行された。タイトルは『評伝矢内原忠雄』（以下、本書とする）。全十二章からなり、「はじめに——いま、なぜ矢内原忠雄か」、「あとがき」が最初と最後に配され、巻末には人名索引、事項索引が付されている。例えば「第六章 大学転出とヨーロッパでの研修」は、「一 東大経済学部助教となる」、「二 イギリス行き」、「三 ドイツでの日々」、「四 パレスチナ旅行とフランス生活」からなるごとく、各章はさらに四つに分けられている。巻末の索引まで含めると六九一頁。かなりの分量である。しかしながら、単文を基調とした文章で読みやすく、読みごたえがある。

本書に見られる矢内原忠雄はどのような人物か。氏の描く後年の矢内原には、家族や他人に対し厳格で、許容することの少ない側面がある。氏は「はじめに——いま、なぜ矢内原忠雄か」で、「五〇数年前に没した人物の足跡をたどり、そこに近代日本の歴史がどう投影し、その時代を彼がいかに生き、闘い、傷ついたかを見極めたいと思ひ立つた。それは対象人物を神格化

し、崇めるものでは決してない。」と述べている。人間的魅力という点でマイナスの側面があえて語られているのは、対象をフエアに語る意図と無関係ではない。無論、ただ厳しいだけの人物として描かれている訳ではない。例えば戦中・戦後にハンセン病施設を訪れ、ハンセン病者を励まし、深い関心と同情を示す矢内原の姿なども読者は本書に見出すことだろう。理想に向かつて邁進し、様々なことを成し遂げる一方で、周囲の無理解に傷つき、家族などにきつくあたつてしまう弱い側面ももっている。本書で語られる矢内原忠雄はこのような人間くさい人物と言えようか。

七〇〇頁近い本書における矢内原の特徴を、気付いた範囲でこのように悉く紹介していく訳にもいくまい。本稿では以下、三つに絞つて特徴を紹介したい。キリスト者の側面、旅好きの側面、言論弾圧との闘いの三つである。

まず、キリスト者の側面について。矢内原は、洗礼はじめ教会の諸典礼に重きをおかず、神への信仰だけを尊ぶ無教会主義であったが、大学卒業後の一九一九年に洗礼を受けている。氏によると、このようなケースは珍しくはないようである。矢内原の場合は周囲の人々につまずきを与えないための受洗であったようである。受洗から約二年後に『基督者の信仰』を刊行。そのなかで矢内原は、キリスト教は歴史的には西洋の宗教というよりもアジアの宗教と言うべきで、日本の国体に反するものではないと主張している。『基督者の信仰』は初めての著書とはいえないものの、矢内原にとつてのキリスト教を考える上で重要なもので

ある。矢内原にとってキリスト教は、歴史的に見ても東西を結ぶ普遍的な判断基準であり、思考の基盤として最も妥当かつ信頼できる思想であったと考えられる。東大経済学部着任後、矢内原はマルクス主義の科学的思考に理解を示しつつ、マルクス主義の唯物史観——物質的・経済的生活関係を歴史発展の究極の原動力とする——については厳しく批判している。キリスト者にとって、歴史は個々人を超える力が作るものであり、そのようなキリスト教の考え方が矢内原の思考の中心にあるからだ。矢内原の唯物論批判は師である内村鑑三に通ずるところが少なくない。本書では、矢内原が内村鑑三からキリスト教をどのように受け継いだかも詳しく述べられている。内村鑑三におけるキリスト教を考える上でも、本書から学べることは多い。

先に矢内原は無教会主義だったと述べたが、それは終始一貫した態度であったようである。無教会主義では聖書とキリストの贖罪による信仰のみを大事とし、教派の組織などを必要不可欠なものとは考えない。つまり、幅を利かす墮落した組織、權威に追従して既得権益を守ることのみにあぐせくするような組織に従わなくてすむということだ。一九四〇年、宗教団体の国家統制を目的とした宗教団体法が施行され、プロテスタントの三十余の教派が合流して日本基督教団が結成される。キリスト教各派の合同は以後、皇国日本の戦争と大東亜共栄圏を支持することになる。矢内原が日本基督教団のこのような態度を批判し得たのは、無教会主義の立場故と考えられる。氏は本書の「あがき」で、「わたしの研究は、狭い意味では芥川龍之介の研

究であり、広い意味では近代日本の知識人の精神史・思想史を究明するもの」だと述べている。組織を守るべく国家宗教（神道）としての神社参拝を推進した日本基督教団との対比において、矢内原の無教会主義的なキリスト教の思想的立場は明確になると言えよう。

次に、旅行好きの側面について。氏の述べるごとく矢内原は旅行が好きだったようである。国内、国外と何度も旅行をしている。第一高等学校時代の河合榮治郎との赤城山への旅や、一高興風会主催の中国東北部（満洲）及び朝鮮への旅行への参加、卒業前の房総方面への旅。東大経済学部に着任してすぐの約二年間の欧米留学では、イギリスやドイツ、イタリア、パレスチナ、フランス、アメリカなどを訪れている。その翌年の一九二四年には約一ヶ月の朝鮮・満洲への調査旅行。一九二七年には台湾へ取材旅行をしている。翌一九二八年には夏休みを利用し樺太へ調査旅行、一九三二年には約一ヶ月の満洲国視察旅行、翌一九三三年には南洋群島調査旅行に出かけている。東大教授辞任後の国内外の伝道旅行、東大復帰後の各地への伝道旅行など、矢内原を理解する上で旅は欠かすことはできない。

矢内原は戦前の東大経済学部で、植民地をいかに統治していくかを考える植民政策の講座を担当している。数々の調査や取材の旅行がこの講座と関係していることは言うまでもあるまい。統計や政府の発表だけを基にいかにか統治するかを考えるのではなく、直接現地に行つてそこに暮らす人々の声を聞き、現地調査をした上でどうすべきかを考える。氏によると、矢内原

のこのような研究態度は吉野作造や新渡戸稲造に学んだものだという。統治する側とされる側、両方の立場にまずは立つてみて、しかる後に両者の間で考える、と言い換えることもできよう。両者の間に立つて考える時、基となるのは前述のキリスト教の精神である。「僕は日本人に対しても朝鮮人に対しても最もその為に尽す道は基督教だと思つて居る。」とは矢内原忠雄「十字架を負ふの決心」の一節だ。矢内原は植民地統治について、一方的な収奪を排し、現地の人々の政治的権利にも応ずるべきだと主張している。

統治すること自体を認めていてはないかと思う読者もいるかもしれない。矢内原は、十九世紀後半のユダヤ人迫害が原因で起こった「ユダヤ民族郷土建設の運動」(シオン運動)に、在来の資本主義経済を超える可能性を見て、「正に一のユートピア」とまで言っている。このように言う背景には前年一九二二年のパレスチナ旅行がある。ロシアやルーマニア、ポーランドからパレスチナに移住してきたユダヤ人青年が、荒地を緑の野に変えているのをその旅行で見ているのだ。他から入ってきた人たちが土地を開墾して所有することを認めるというのは、ジョン・ロツクの『統治二論』を思わせるかもしれない。ロツクは所有権の起源を労働に求める。それ故、現地民には未開の地を耕す力がないのでその地に入って耕し、その耕すという労働によってその地を所有する権利が生じる、つまり、植民地支配を肯定してしまう危うさがロツクの思想にはある。矢内原にそのつもりはなくとも、解釈によって悪用されかねない

危うさが矢内原の主張にもあると考えられよう。

しかしながら、筆者としては、矢内原は能う限り現地の人たちの立場も考え、誠実に事に当たつたとしたい。例えば矢内原が植民政策の講座を受け持ち(一九三三年、朝鮮を再度訪れた時(一九二四年)には、すでに日本による同化主義的な統治が定着してしまつていた。そのような中、「朝鮮に社会上及び政治上自主的發展を遂げしめ、自主的地位を容認する」(朝鮮統治の方針)よう矢内原は提言している。日本が朝鮮に入り込んでいるのは事実であるから、そこは認めざるを得ないとして、その上で朝鮮の政治的自主性をまずは認める地点を指すというのは、現実的な提言として評価されてよいだろう。

最後に、言論弾圧との闘いについて。氏が指摘することく、表現の自由が保障されない時には沈黙を守ることも抵抗の一つだが、矢内原は沈黙することなく書き続けている。世の雑誌や新聞への発表が難しくなってくると、個人誌『嘉信』にて戦争が終わるまで政府批判を展開。「彼(矢内原——河内注)は検閲を意識し、慎重に筆を運ぶ。それ故、例を日本の軍部には直接向けず、「現今軍国主義が政治権力に対し最も重要な決定的勢力を振へることは、ナチス独逸を始めとして殆んど世界的現象とも言ふを得るであらう」と書くように、一般化・普遍化した方法を」とつたという。検閲によって表現の自由が脅かされる中、筆による闘いを粘り強く続けたと言えようか。

氏ははつきりと指摘されてはいないが、本書を読んでいて思ふのは、あるいは旅先での講演などにも言論弾圧への抵抗とい

った側面があつたのではないか、ということだ。氏は「書物は刊行された限り、どこかに残るものだ。官憲がいくら躍起になつても、完全に消せるものではない。」と述べている。これは講演でしゃべつたことにも当てはまるであらう。矢内原が第一高等学校在学中に聞いた徳富蘆花の演説「謀叛論」も、文部省役人の知るところとなり問題とされたが、聞いた人たちの記憶や日記に残り続けている。矢内原は大学を辞めた後、『嘉信』に自らの考えを載せることだけでなく、各地への伝道旅行にも力を注いでいる。参加者によると、若者たちとの家庭集會が「戦闘の小集団」形成の機会となつていたこと。あるいは、「時局キリスト教講演會」に警視庁刑事が来たこと。こういったことから、大学辞職後も筆と口の両方で、反戦的な活動を続けていたものと思われる。

言論弾圧との闘いに関わることとして、いわゆる矢内原事件についても少し述べておきたい。矢内原事件とは、東大経済学部を矢内原が一九三七年に辞めることになつた、一連の出来事のこと。同年九月号の『中央公論』に矢内原は「国家の理想」という論文を発表。検閲を十分意識して書いたものの、「安寧秩序ヲ紊乱スル」との理由で一部削除処分、伏せ字の多い論となつてしまう。それだけにとどまらず、雑誌の発売と同時に全文削除になり、以後、矢内原は官憲による要注意人物として当局の監視下に置かれることとなる。経済学部でも問題となり、右翼の学者蓑田胸喜らの工作もあつて、同年の十二月に矢内原は東大を辞めることになつた。

従来の研究では、矢内原の辞任を大学内の派閥抗争の結果と解している。いかにも大学内に限つて見れば、そのように解することも可能かもしれない。本書において氏はこの事件を大局的な観点、もつと言えば世界的な観点から捉えなおしている。第一次大戦後にイタリア・ドイツ・スペイン、南米諸国・東欧諸国に現れた全体主義的・国家主義的独裁、つまりファシズムは、日本においても猛威を振るつた。それが第一の要因となつて矢内原事件が生じたと氏は指摘する。本書における矢内原は派閥抗争の哀れな犠牲者ではない。侵略戦争を進める国家とその手先による弾圧や画策と闘い続ける者として語られている点に、本書の個性がある。

以上、本書における矢内原の特徴を三点に絞つて紹介した。氏は「はじめに——いま、なぜ矢内原忠雄か」で、戦争の時代を生きた矢内原の生涯をたどることに今日的な意義があるとして、憲法九条改正をめぐる論議が現在盛んであることや、共謀罪が施行されたことに触れている。筆者はこれらに加え、悪化する日韓関係について理解し、考える上で、植民地・朝鮮に関する矢内原の調査や態度に学ぶべきものがあることを指摘したい。本書は単に矢内原忠雄の評伝としてユニークで優れているだけでなく、今日の国際的な問題を解決する上でも示唆的な、重要な一冊と言える。

二〇一九年四月 新教出版社 六九一頁 八〇〇〇円＋税

(北九州市立大学文学部准教授)